

“一 A 就 B” 構文の非プロトタイプの意味

島津 幸子

1. はじめに

複文形式の前節に“一”，後節に“就”が置かれる形式を“一 A 就 B”構文と呼び，本稿での考察対象とする。当該の構文には従来2つの意味があるとされてきた。呂叔湘主编 1980:526-527 に記述された次の2つである¹⁾。

①前後二つの動詞が異なり，ある動作や状況が出現した後引き続いて別の動作や状況が起ることを表す。主語は同一でもよいし，二つの主語に分かれてもよい。

(1) 一请就来。(招くとやって来る。)

(2) 他一解释我就懂了。(彼が説明すると私はすぐに分かった。)

②前後二つの動詞が同じで，主語も同じである。動作がいったん起るとある程度に達するかある結果を得る。

後ろの動詞は省略されたり，‘是’で置き換えられたりすることが多い。

(3) 我们在西安一住就住了十年。

(私たちは西安に住み出すと瞬く間に10年経った。)

(4) 一讲就是两个小时。(話し出すと2時間にもなった。)

王弘宇 2001 は当該形式の構文的意味を扱った数少ない論考²⁾ のうちの一つであるが，呂叔湘主编 1980:526-527 における②タイプについては踏み込んだ考察をせず，考察対象を①タイプのみに限っている。①タイプの意味記述をまずは正しいと認めた上でこの意味記述に合致するにも拘わらず不自然な文が作り出されてしまう事実を指摘している。しかし，

さらに深いルールがあるとして示した考え方ではなお解決できない問題が残されている³⁾。

②タイプの意味については、吳春仙 1999:15 が“一 V 就是 NP”形式の NP と V の意味関係を 6 つに分類している⁴⁾ ほか、李宇明 2000:159-170 は“一 V…数量”という構造を“一 V + 就是 + 数量”，“一 V + 就 V + 数量”，“一 V + 就 + 数量”，“一 V + 数量”の 4 つのタイプに分け、各タイプ相互の関係、後ろの数量が主観的に大きな量を表す理由⁵⁾ などについて論じている。しかし、特異な形式をもつこの②の意味について、なぜこの意味が存在するのかという素朴な疑問に対して回答を与えるものではない。

島津 2004b:152 では①を中核的意味、②を周辺的意味とし、A、B が 2 つの出来事と捉えられなくなるに従って中核的意味から周辺的意味へ移行していくと述べた。島津 2006:29-31 では“一 A 就 B”形式の文の意味拡張の様相について、事態 A が「背景化」しやすいこと⁶⁾、事態 B が話し手の観察結果であることから説明を試みた。①の意味と②の意味の繋がりについて若干言及はしたものの、やはり踏み込んだ考察を行ったとは言いがたい。

当該構文の意味については邢福义 2001:271-272 が“刚一 A 就 B”形式の文から“刚”を落として“一 A 就 B”形式とした場合に A と B の間に内在的な関連性が生じることを指摘している。島津 2004b では“一 A 就 B”と“刚一 A 就 B”を比較し、“刚一 A 就 B”では事態 A と事態 B が時間の近接性を満たすだけであるのに対し、“一 A 就 B”は 2 つの統語枠に入るフレーズに意味的制限がかかり、単に時間が近接しているだけの 2 つの事態を叙述の対象とすることができないことを指摘した。

なぜ当該構文が②の非プロトタイプの意味⁷⁾をもつのか、ということに妥当な説明を与えようとするならば、①の意味と②の意味との繋がりについて明らかにしなければならない。そのためには当該構文の構文的

意味について再考する必要がある、その過程において2つの事態の間に内在的な関連性があるという意味がどこから生じるのかをぜひとも明らかにしなければならないと考える。

本稿では“一 A 就 B” 構文の構文の意味を再確認し、なぜ当該構文が②の非プロトタイプの意味をもつのか、そのことについて妥当な説明を与えることを試みる。

2. 構文の意味の再確認

2.1 内在的関連性

本節では、まず当該構文が「2つの事態の間に内在的な関連性があること」を構文の意味としてもっていることを再確認しておく。

刘丹青 2005 は話し手の主観的予測に基づいて想定されるスケールにおける極端値を“连”というトピックフォーカスマーカーによってマークし、VP (AP) を実現する可能性が最も低いにもかかわらず実際には意外にも VP (AP) を実現する、というところから強調の意味を表す「“连”字句」のうち、非プロトタイプのものについてその分類と生成のメカニズムを提示している。具体的には、“连 XP 都 / 也 VP/AP” は固定化された構文であり、どんな成分であってもこの構文に入れば予測との間に強いコントラストを成すことによって強調の意味を帯びる文意を表すことが可能になる、と説明する。非プロトタイプの「“连”字句」は従来の成分文法モデルではうまく説明がつかず、その意味でより典型的な「構文」といえるが、その解釈に構文文法の適用が有効であることを示しているのである。

邢福义 2001:271-272 は次の例を挙げて以下のように説明している。

- (5) 没想到，他们刚一回去，老队长就被揪了出来。[杨啸：岩画探奇]
(彼らが帰ったとたんにベテランの隊長が捕まるなんて思いもし

なかった。)

前後の行為の近接は偶然性をもつ。“他们刚回去，老队长就……”は言えてもとの意味に合致するが，“他们一回去，老队长就……”とするともとの意味と違って来る，彼らが帰ったこととベテランの隊長が捕まったこととの間に何らかの内在的関連性が生じるようだ。

邢福义 2001 の観察についてここで注目したいのは，“刚 A 就 B”形式においては何の繋がりもなく，その継起が偶然のものと捉えられていた 2 つの事態が“他们一回去，老队长就被揪了出来。”とした場合には何らかの「内在的関連性」を帯びているように感じられるという事実である。もともと何の繋がりもない A, B 2 つの事態が“一 A 就 B”形式に入ること何らかの繋がりをもつように感じられるということは，当該形式が既に「内在的関連性」という構文的意味を獲得していることを裏付けるものと言えよう。

島津 2004b:150 では次の例を挙げた。

- (6) 他想到自己还没吃饭呢，刚刚想到厨房去弄些吃的，桌上的电话就响了。 [谈歌：城市热风]

(彼は自分がまだご飯を食べていないことに思い至り，台所へ行って食べものを漁ってこようと思ったところ，机上の電話が鳴った。)

(6)では「台所へ行って食べ物を漁ろうと思う」ことと「机上の電話が鳴る」ことは偶然継起した事態と捉えられるのみで相互の間に内在的関連性は認められない。例文(6)の“刚刚”⁸⁾を“一”に置き換えることはできない。

上記のように当該構文は時間の近接性を満たすだけではその 2 つの事態を叙述対象とすることはできず，A と B の間には何らかの関連性が必要なのである。

2.2 連鎖的継起とそれを誘発する背景要因

①の意味は「ある動作や状況が出現した後引き続いて別の動作や状況が起ることを表す」ということであった。王弘宇 2001 はこの①の意味が正しいことを認めた上で、誤用例が後を絶たないとして同 :134 では留学生の作文に見られたという次の3つの誤用例を挙げている⁹⁾。

(7) ? 下了课以后我一去食堂就吃午饭。

(表したい意味：授業が終わった後、私は食堂へ行くと昼食を食べた。)

(8) ? 我回头一看就吓了一大跳。

(表したい意味：私は振り向いて一目見るとびっくりした。)

(9) ? 她一看了手表, 就站起来, 走到付款台交了钱, 然后走出了。

(表したい意味：彼女は腕時計を見ると立ち上がってレジまで歩いていってお金を払い、それから出て行った。)

これらの誤用例に対し、「中間項跳び越え¹⁰⁾」の考え方を以てその理由を説明しようと試みているが、その概略は次のようなものである。

A, B, C という順序で生起する事柄の序列（通常序列）が想定されるのに、実際には B が起らず、A の次に C が起るという状況（非通常序列）が現れたときに初めて“一 A 就 B”形式を用いて叙述する。つまり、当該形式が叙述対象に選ぶのは、B（中間項）を跳び越えて A, C が繋がる状況であり、そのことを正しく捉えれば当該形式はむしろ“一 A 就 C”形式と表示すべきである。

しかし、同 :139 で筆者自身が指摘しているように、この「中間項跳び越え」の考え方では逆に次のような例に適切な解釈を与えることができない¹¹⁾。

(10) 水一到零度就结冰。(水は零度になると凍る。)

(11) 一到十八岁就有选举权。(18歳になると選挙権をもつ。)

「中間項跳び越え」は A, B, C の通常序列が想定されるどころ、B を

跳び越えて A と C が繋がる、つまり、あるべき中間項が介在しない時に当該構文を用いると考えるわけだが、(10) (11) のような文が問題なく成立することを考え合わせれば、むしろ A と B の間にはあるべき中間項がないのではなく、他のいかなる事柄も入り込まず、何ものにも妨げられることなくスムーズに2つの出来事が繋がっているように継起することを表していると考えるべきではないだろうか。(10) も (11) も王弘宇 2001 が指摘する通り中間項を想定することはできない。(10) はどんな水も共通にもつ属性について述べている。どんな水も水でありさえすれば零度になると凍るのである。(11) はある国の国民が共通してもつ社会的権利について述べている。その国の国民であれば誰であれ 18 歳になると自動的に選挙権を与えられるのである。2.1 節では、当該構文が固定化された構文であり、「2つの事態の間に何らかの繋がりがある」という意味を構文の意味としてもっていることを確認した。ではなぜ「2つの事態の間に何らかの繋がりがある」ことが構文の意味の中に含まれるのだろうか。そのことを例文 (10) (11) の成立と合わせて考えてみよう。(10) の文が表す命題が成立する背景には水の属性ということがある。(11) の文が表す命題が成立する背景にはある国の国民の社会的な属性ということがある。この2つの文ではある背景要因 ((10) では水の属性, (11) ではある国の国民の属性) が存在し、前件 ((10) では水が零度になる, (11) では人が 18 歳になる) が起ると引き続いて後件 ((10) では水が凍る, (11) では人が選挙権をもつ) が起ることが述べられている¹²⁾。水の物理的特性や国民の社会的属性が背景要因となって前件と後件が連鎖的に継起するのである。「2つの事態の間に何らかの繋がりがある」という意味は、2つの事態の連鎖的な継起をいわば誘発する背景要因の存在に支えられていると考えるわけである。

構文の意味を考える上では、連鎖的な継起であることも重要な点である。ここで王弘宇 2001:134 の挙げた誤用例を再録する。

(12) ?我回头一看就吓了一大跳。(= (8))

同 :138 では (12) が不自然となる理由を「振り返って見る」と「びっくりする」が続けて起り、二者の間に中間項が存在しないからだと説明する。本稿では「見る」ことと「びっくりする」ことはほぼ同時に起っており、通常この2つの事態の出現の背景に何らかの要因を想定しないことに起因するものと考ええる。次の例では前節に同じく“看”が用いられているが、当該構文の文として問題なく成立している¹³⁾。

(13) 吕建国想问问是不是教育局不想接收了, 还没问呢, 就听到门一响, 有人进来了。他回头一看, 心就乱了, 什么话都没了, 忙说行行, 转身笑道: “杨大姐你坐。” [谈歌: 大厂续编]

(吕建国は教育局が工場を接收したくないと考えているのかどうか聞きたかったがまだ聞いていなかったところ、ドアが音をたて、誰かが入って来たのが聞こえた。彼は振り返って一目見ると、心が乱れ、何も言えず、慌てて(電話の相手に)わかったと言い、向きなおって微笑んで言った。「楊さんお座り下さい。」)

(13) は市の教育局からの電話を受けた工場長の呂建国が日頃から恐れている楊婷という女性の登場に心乱れ、教育局が国有企業を接收して学校をつくる最初のケースについていろいろ聞くことを断念して受話器を置く場面である。呂工場長が日頃から楊婷という女性を恐れているという背景要因があるために一目見るという動作のあと、連鎖的に心が乱れるという心理変化が起ったのである。

また、次の例では前件は後件の付帯状況と言える。

(14) 温泉一慌乱, 摔了一个体温表。 [池莉: 一去永不回]

(温泉は慌てて体温計を落として壊してしまった。)

(14) は“就”を用いて“温泉一慌乱, 就摔了一个体温表。”のようにすると不自然になる。前件(慌てふためく)は後件(体温計を落として壊した)

の付帯状況であると考えられ、そもそも2つの事態が「連鎖的に」継起したと捉えることができないことが不自然になる理由だと考えられる。

王弘宇 2001:134 が挙げた誤用例の1つ目の例を再録する。

(15) ? 下了课以后我一去食堂就吃午饭。(= (7))

同:138はこの例が誤用となる理由を「中間項跳び越え」によって次のように説明している。「食堂へ行く」ことと「昼食を食べる」ことは引き続いて起ったことだが、両者の間には中間項が存在しない。留学生が伝えようとしたのは“我一下课（不做其他）就去食堂吃午饭。”「私は授業が終わると（他のことはせず）食堂に行って昼食を食べた」という意味であり、そうであれば「授業が終わる」と「食堂に行く」の間に先生に授業に関する質問をする、いったん宿舎に帰る、といった中間項があり得る。本稿では例文(15)が不自然になる理由を次のように考える。この文の“去食堂吃午饭”「食堂へ行って昼食を食べる」（或いは「昼食を食べるために食堂に行く」）は連動文構造であり、予めセットになった事態継起である。また、食堂はそもそも食事をする場所であり、「食堂へ行く」と「昼食を食べる」ことの連鎖的継起の背景に何らかの要因を想定することは意味をなさない。

ここまで見てきたことから、本稿は当該構文が「(何らかの背景要因が存在するために) 事態 A が起ると連鎖的に事態 B が起る」という意味をもつと考える。「何らかの背景要因が存在するために」を括弧に入れたのは、当該構文の文において明示的な言語表現となっておらず、まさに背景化していることを示すためである。

3. プロトタイプの文

3.1 プロトタイプ of 文にみる構文的意味

本章ではプロトタイプ of 文について「(何らかの背景要因が存在するた

めに) 事態 A が起ると連鎖的に事態 B が起る」という構文的意味の記述が妥当であることを見ていく。

次の例を見られたい。

(16) 龍二一到, 我们就要从几代居住的屋子里搬出去, 搬到茅屋里去住。

[余华: 活着]

(龍二が来たら, 私達は何代かにわたって住んできた家から出てあばら家に移り住まなければならないのだった。)

先行文脈において, 家の主人である福貴が賭博にのめりこんで大損をして差し押さえられた土地と家を龍二に買われたという背景要因が述べられている。そのような背景要因のもとに前件(龍二がやってくる)が起るとそれを契機として必然的に後件(何代かにわたって住んできた家を出てあばら家に移り住む)が起ると述べているのである。

次の例も同様である。

(17) 我大声一吼, 有庆的身体就哆嗦一下, 我又给他一巴掌, 有庆缩着身体完全吓傻了。这时那个女老师走过来气冲冲问我: “你是什么人? 这是学校, 不是乡下。”

[余华: 活着]

(私が大声でどなると, 有慶の身体は震えた。私はまた彼にビンタをし, 有慶は身体を縮めて完全にびっくりして固まってしまった。この時その女性教師は私のほうへやってきてぷりぷりして訊ねた。「あなたは誰なんですか? ここは学校です, 田舎じゃないんです。」)

父である福貴がもう学校へ行きたくないと言っていた有慶の様子を見に来たところ, 教室の中にいた有慶はまじめに勉強せず, 前の子の頭に向けて何かを投げている。妻(有慶の母)の病気がますます重くなっている状況で, 姉の鳳霞を他人の家に行ってまで有慶を学校に行かせているのにそんな様子なので父は怒りにまかせて有慶にビンタをし, 大声を出した直後の場面である。有慶が父の怒りを目の当たりにし, 父を恐れて

いるという背景要因があるため、前件（大声で叱る）が起ると後件（有慶の身体が震える）が連鎖的に起ったのである。

(18) 好容易过了年, 吕建国一上班, 就把丢车的事交给秘书方大众办去了。 [谈歌: 大厂]

(やっとのことで年を越し、呂建国は出勤するや車の紛失事件の処理を秘書の方大衆に頼みに行った。)

呂建国が工場長をしているこの工場は経営不振で従業員の給料の遅配が続き、工場の車を売却せざるを得なくなり、工場には車が一台しか残されていなかったが、その唯一の車が紛失してしまったのだ。年末年始もそのことで工場長の呂は大変な毎日を過ごし、やっとのことで年を越した。このような背景が先行文脈で明らかにされている。こうした背景要因があって呂建国は前件（出勤する）が起るやすぐに車の紛失事件の処理を秘書の方大衆に頼みに行くこととなったのである。

次の例では後件は状態を表している。

(19) 毛嫂的儿子原是化工一厂的工人, 工伤住了医院, 现在企业一兼并, 就没人管, 医药费也不报销了。 [谈歌: 城市热风]

(毛姉さんの息子はもとは化学工業第一工場の労働者で、労働中の事故で入院した。今企業が吸収合併されると誰も管理する者がいなくなり、立て替えた医療費も清算されなくなった。)

吸収合併された化工第一工場では、給料が支払われず、従業員が市の委員会に訴えに行くなど混乱した状態が続いている。例(19)は遡って企業の吸収合併を契機として誰も管理する者がいない状態が現れたことを述べている。化工第一工場では吸収合併される前から経営不振が続いていた。そのことが背景要因になっているものと考えられる。

次の例を見られたい。

(20) 于是我跟着他走进教室, 看着他从书包里拿出药箱, 打开瓶盖取出药片, 放入嘴中一仰头就咽了下去。就那么干巴巴地咽下去,

他都不需要水的帮助。 [余华：在细雨中呼喊]
(そこで私は彼の後について教室へ入り、彼がカバンの中から薬箱を取り出して瓶のふたを開けて薬を取り出し、口に放り込んでくっと上を向くと飲み込んだのを見た。そうやって水の助けも必要としないでカラカラのまま飲み込んだのだ。)

8歳の子供である国慶がまるで医者のように薬の説明をし、どこが悪くてどの薬を飲まなければならないかを解説し、運動場から教室へ移動して薬を飲んだ場面を「私」が見ているところである。先行文脈でわずか8歳の国慶がまるで医者のようにあることが述べられているわけだが、そうした背景要因のもとに、前件（上を向く）が起るとすぐに後件（薬を飲み込む）が起ったことが述べられている。

それぞれの文において、何らかの背景要因があり、前件が起るとそれを契機として後件が連鎖的に起った、ということが述べられていることが分かる。

3.2 恒常的事態の叙述

先の王弘宇 2001:134 の誤用例 ((15) = (7)) から前半の“下了课以后”を除いた例 (21a) はやはり不自然であるが、“午饭”を“麻婆豆腐”に換えた (21b) は自然な文となる。

(21) a? 我一去食堂就吃午饭。

b 我一去食堂就吃麻婆豆腐。(私は食堂に行くといつも麻婆豆腐を食べる。)

ただし、(21b) が自然な文となるのは日本語訳に示したように恒常的な読みの場合に限られる。一回的な事態としての読みではこの文はやはり不自然である。しかも (21b) の文が表すのは「私は食堂に行くといつも麻婆豆腐を食べるほど麻婆豆腐が好きだ」という意味であり、私の食べ物についての好みを叙述しているのである。私が何よりも麻婆豆腐が好きだ

という食べ物についての好みは、実は前件（食堂に行く）と後件（麻婆豆腐を食べる）の連鎖的継起を恒常的に誘発する背景要因なのである。

- (22) 你们是不知道, 李缅甸过去是个非常爱开玩笑的人, 整天乐呵呵的, 什么事也不发愁, 一张嘴就能把人笑死, 一点不像个搞工科的人。

[王朔: 无人喝彩]

(あなたたちは知らないが、李緬寧は以前はとても冗談好きで、一日中にこにこしており、どんなことも気に病まず、口を開けば人を死ぬほど笑わせることができ、少しも理工系の人間らしくなかったのです。)

この例ではとても冗談好きで理工系の人間らしくないという以前の李緬寧の性格が背景要因としてあるがゆえに、前件（口を開く）が起るといつも連鎖的に後件（人を死ぬほど笑わせることができる）が起るということを表している。

- (23) 医生说胎儿有点偏大, 让她适当控制饮食。现在的人啊, 一怀孕就拼命补, 这样没好处的, 医生说, 胎儿太大容易难产, 为什么现在剖腹产越来越多, 就是这个道理。 [滕肖澜: 蓝宝石戒指]

(医者は胎児が少し大きくなりすぎていると言い、彼女に食事を適度に制限するようにさせた。今の人は妊娠すると必死に栄養を摂るが、そうすることにはメリットはない。医者は言った。胎児が大きすぎると難産になりやすい。今帝王切開がますます多くなっているのはこうした理由からだ。)

(23) では、医者が、今の人たちについて、妊娠すると必死に栄養を摂る傾向にあることを指摘している。背景要因としては今の人たちが共通してもっている属性があり、前件（妊娠する）が起ると連鎖的に後件（必死に栄養をとる）が起ると述べている。

- (24) “早上当然可以溜, 晚上同样也可以溜, 你是那么热衷看热闹, 你们门上的那把破锁又是那么陈旧, 形同虚设, 任何人都可以不

用钥匙，一扭就开。” [王朔：人莫予毒]

(「朝はもちろん忍び込むことができるが、夜も同じように忍び込むことができる。あなたはあんなに騒ぎを見ることに熱中しているし、あなた方のドアのあのぼろ鍵はあんなに古いし、あつて無きが如し、誰だって鍵を使わなくても捻れば開く。)」

(24) では、ドアの鍵が古くなっていて誰でも開けられ、鍵としての機能を果たせなくなっていることが述べられているが、古くなって役に立たないというこのドアの属性が背景要因となっている。この要因があるため、前件（捻る）が起ると連鎖的に後件（開く）が起るのである。

人や事物の属性が背景要因である場合、属性がそもそも恒常性をもつため、それによって誘発される2つの事態の連鎖も当然恒常的なものとなる。A、B 2つの事態継起はリアルな空間、時間に起ったものではないために個別具体性を欠き、むしろ背景要因である属性を裏付ける根拠としての役割が強くなっているものと思われる。

4. 非プロトタイプの文

4.1 “一 V₁ 就 V₁P”

前節では人や事物の属性を背景要因とするプロトタイプの文において、A、B 2つの事態の連鎖的継起が個別性、具体性を欠き、背景要因を裏付ける根拠として働いていると捉えられることを見た。本節では、“一 V₁ 就 V₁P” の文についても2つの事態の連鎖的な継起が背景要因を裏付ける根拠となっていると考えられることを見ていく。

(25) 杨清民接过扇子，呼呼地扇着，笑道：早说来看看您的，可是总是瞎忙，抽不出空来。回到家又累得不想动，一看电视就看进去了，更不想动了。

[谈歌：城市警察]

(楊清民は扇子を受け取るとパタパタとあおぎ、にこにこして言った。「あなたに会いに来ると早くに言っておきながら、いつもなぜか忙しくて時間がとれなかった。家に帰ったら帰ったで、疲れて動かたくなくてテレビを見出したら瞬く間に見入ってしまい、ますます動かたくなくなるという始末で。)」

(25) では家に帰った時点で疲れて動かたくない状態になっていることが同じ文の前半で語られているが、これが背景要因である。そのために、前件（テレビを見る）が起ると引き続いて後件（テレビに見入る）が起るのであるが、テレビを見る動作が始まるとすぐにテレビに見入ってしまう状態に移行することを述べている。

(25) ではテレビを見る動作がどのような動作であるかが述べられていることに注意されたい。換言すれば、動作の特徴づけを行っている文である。動作の特徴づけが何のために行われているかといえ、それは動くのが億劫なほど疲れているという背景要因を裏付けるためであると言えよう。

(26) 二喜家の邻居都喜欢凤霞，我一去，他们就夸她，说她又勤快又聪明。扫地时连别人家的屋前也扫，一扫就扫半条街，邻居看到凤霞汗都出来了，走过去拍拍她，让她别扫了，她这才笑咪咪地回到自己屋里。 [余华：活着]

(二喜の家の隣人は皆鳳霞のことが好きで、私が行くと、彼らは彼女が働き者で賢いとほめる。道を掃く時には他人の家の前も掃く。掃けば通りの半分も掃いてしまう。隣人たちは鳳霞が汗までかいているのを見て、近寄って身体を叩き、もう掃かなくていいと告げるとやっとなにこにこ自分の家に帰るのだった。)

(26) では鳳霞が働き者で賢いことが先行文脈で述べられているが、これが背景要因である。そのために、ひとたび前件（道を掃く）が起れば後

件（通りの半分を掃いてしまう）が連鎖的に起るとということが述べられている。当該の文は(25)と同様、「(鳳霞が) 道を掃く」という動作がどのような動作であるかが述べられ、やはり動作の特徴づけを行っていることが分かる。同時に、道を掃くと通りの半分も掃いてしまうという特徴を有するこの動作は鳳霞が働き者だという背景要因を裏付ける根拠となっている。

(27) 凤霞看到邻居的女人坐在门前织毛衣，手穿来插去的，心里喜欢她就搬着把凳子坐到跟前看，一看就看半天，人都看呆了。

[余华：活着]

(鳳霞は隣の家の人の人が家の前でセーターを編み、手が行ったりきたりするのを見て気に入ってしまい、腰掛を運んでその目の前に座り、いったん見始めると半日も見続け、見入ってしまったのだった。)

背景要因は鳳霞が隣の家の人の人がセーターを編むのを見るのが気に入ったということである。そのために前件（見始める）が起ると後件（長い時間見る）が連鎖的に起るというのである。「いったん見始めると半日も見ている」と特徴づけられた動作は、セーターを編む手の動きを見るのが大好きだという背景要因を裏付ける根拠となっていることが分かる。

“一 V_1 就 V_1P ” という形式は単にある動作が起ったということ述べるのではなく、動作の特徴づけという表現機能を担っており、さらにその特徴づけられた動作が背景要因を裏付ける根拠として働いていることを見てきた。この形式では、最初の動詞は当該構文の形式に合わせるため、換言すれば統語論上の要請により用いられた動詞に過ぎず、「2つの事態の連鎖的継起」としての個別性、具体性を欠いていると言えよう。

4.2 “一 V 就是 NP”

本節では非プロトタイプの意味を表すとされる“一 V 就是 NP”という形式の文について考察する。論文の冒頭部分で挙げた呂叔湘主编 1980:526-527 の例を (28a) として再録する。

(28) a 一讲就是两个小时。(話し出すと 2 時間にもなった。)(= (4))

b 一讲就讲了两个小时。(話し出すと 2 時間にもなった。)

(28a) は単独で挙げられた文であるが、例えば会議である人が話し始めたら滔滔と 2 時間も話し続けた、という場合に用いられることが考えられる。(28b) は 4.1 節で考察した“一 V₁ 就 V₁P”形式の文である。(28a) と (28b) は形式の違いはあるが、意味の違いは殆どない。呂叔湘主编 1980:527 で“一 V 就是 NP”が“一 V₁ 就 V₁P”から派生したものと記述される所以である。(28b) は「話す」動作について、始まるとあつという間に 2 時間が経過するというように特徴づけを行っているわけであるが、動作の特徴づけに貢献しているのは言うまでもなく“两个小时”である。様態補語を伴う“她说汉语说得很流利。”「彼女は流暢に中国語を話す」という文で、様態補語(“很流利”)に前接する“得”が必ず動詞に後接する必要があるために 2 つ目の動詞は統語論的に必須であるだけで意味論的には余剰成分であるのと同様、“一 V₁ 就 V₁P”形式の 2 つ目の動詞は“两个小时”があるために統語論的に必要であるだけで意味論的には余剰成分である¹⁴⁾。“两个小时”が名詞句であるために意味論上の余剰成分(“讲”)を“是”に置き換えて成立しているのが“一 V 就是 NP”形式なのである。

しかし次の (29) では“一 V₁ 就 V₁P”形式への変換は難しい。

(29) 家珍在床上躺就是二十多天, 有时觉得她好些了, 有时又觉得她真的快去了。 [余华: 活着]

(家珍はいったんベッドに横になると 20 日以上にもなるのだった。いくらかよくなったと思う時もあれば、本当に終わりが近いと思う時もあった。)

(29)では当該構文が最初の節に用いられている。家珍がひとたびベッドに横になるとあっという間に20日以上が経過するということだが、動作の特徴づけというよりは20以上の時間の経過という結果成分、換言すれば主観的に大きな量が、深刻な病状という背景要因の裏付けに寄与している構図が見えてくる。

次の例は後件が数量ではなく、“一 V₁ 就 V₁P”形式への変換はもはやできない。

(30) 那个黑黑的小伙子取笑说：“要不说你们老九办不成事。一张嘴就是傻话。” [冯骥才：走进暴风雨]

(その色黒の若者は冗談まじりに言った。「(だからあんたたち知識人は何にもできないっていうんだよ。口を開けば馬鹿げた話ばかりじゃないか。)」)

(30)では背景要因は話し手が考えるところの、何も成し遂げられないという知識人の属性である。この知識人の属性があるために、前件(口を開く)が起ると連鎖的に後件(馬鹿げた話)が出現すると述べていることになる。「口を開けば馬鹿げた話が現れる」ということは全体として背景要因(知識人は何も成し遂げることができない)を裏付ける根拠となっているのである。

(31) 河湾的回流上映着朦胧的月色，苇子丛里蚊子搅成团，手在脸上
一抹就是一手血。 [张贤亮：河的子孙]

(川が曲がって水が逆流しているところにおぼろな月の色が映りこみ、葦の草むらには蚊が塊となっていた。手で顔をぬぐってみると手一面が血に染まった。)

(31)の背景要因は葦の草むらが塊となるほど蚊の多い場所だということである。そのため、前件(手で顔をぬぐう)が起ると連鎖的に後件(手のひら一杯の血)が出現するというのである。「手で顔をぬぐってみると手のひらが血で染まる」という事態は葦の草むらが塊となるほど蚊が多

い場所だという背景要因を裏付ける根拠である。

また、後件が程度が高いという意味合いを含まないものもある。

- (32) 一个人和另一个软弱的人常在一起，就容易发挥自己自信坚强的一面；但与一个充满主见的人常在一起，就显得顺从，柔和，依赖性多一些。别看贺达在外边是强者，一进门就是懦夫。他早已习惯妻子尹菊花在各种生活琐事上对他喋喋不休地发表不满。每每此时，他就默不作声。 [冯骥才：走进暴风雨]

(ある人間が軟弱な別の人間といつも一緒にいると、自信に満ちた強い一面を容易に発揮できる。しかししっかりとした考えをもった人といつも一緒にいると、従順で穏やかで依頼心が強くなるようだ。賀達は外では強い人間だが、ひとたび家に入ると臆病者になる。彼は妻の尹菊花が生活のこまごまとした事で彼に際限なく文句を言うのにとっくに慣れてしまった。そんな時はいつも黙ってしまうのだ。)

先行文脈において、賀達の妻は一歳年上で裁判所で働く有能な女性であり、賀達はふだん遅く帰宅した時には他の人のいる前であっても面子をつぶされるほど罵倒されることが述べられている。賀達と妻の力関係は明らかなのである。そのことが背景要因となり、前件（家に入る）が起ると連鎖的に後件（臆病者）になるのである。「ひとたび家に入ると臆病者になる」ことは前述の背景要因を裏付ける根拠となっている。当該の文では前の節で賀達が外では強い人間であることが述べられ、これと対比し、家の中では臆病者だということが述べられている。

“一V就是NP”形式の文においては、動作性が捨象され、そもそも2つの事態の継起と捉えがなくなっていると言えよう。そしてやはり背景要因を裏付けるという方向性がはっきりと見てとれる点は恒常的事態を叙述するプロトタイプ文，“一V₁就V₁P”形式の非プロトタイプ文と同様である。

4.3 非プロトタイプの文と構文的意味

李宇明 2000:160 は“一 V…数量”構造を次の4つに分類している。

甲：“一 V + 就是 + 数量” (“一坐就是半天”)

乙：“一 V + 就 V + 数量” (“一坐就坐半天”)

丙：“一 V + 就 + 数量” (“一坐就半天”)

丁：“一 V + 数量” (“一坐半天”)

同:168-169 ではこの数量が主観的に大きな量となることの理由を次のように説明する。

“一 V”の非自足性とその影響力を数量に「投射」するため、必然的に数量との間に意味上及び統語論上の繋がりを生じさせ、なおかつ構造に「通常と異なる」という意味を付与することになる。“一 V”は主観的に小さな量であるという特徴を含んでおり、小さな量の「通常と異なる」結果がつまり「大きな量」なのである。

本稿では次のように考える。甲と乙は本稿で見てきた非プロトタイプの文の一部である。非プロトタイプの文では“一 V 就是 NP”の NP は数量に限られず、“一 V₁ 就 V₁P”の“V₁P”の中にも数量が生起しないものがあるからである。“一 V₁ 就 V₁P”も“一 V 就是 NP”も2つの事態の連鎖的継起そのものを述べることに主眼が置かれてはおらず、むしろそれは背景要因を裏付ける根拠と捉えることができる。背景要因を裏付ける根拠を表すのに数量表現が用いられる場合に、主観的に小さな量ではなく大きな量を用いるのは自然なことだと考えられよう。

5. 終わりに

“一 A 就 B”構文には呂叔湘主编 1980:526-527 が示す通り、2つの意味があると捉えられてきた。そのうち、非プロトタイプの意味は形式が特異であるのに加え、意味記述においてもプロトタイプの意味とかけ離れ

ており、2つの意味がどのように繋がっているのか分かりにくい。そのことについて明確に指摘した論考もこれまでなかった。本稿では、まず当該構文が固定化された「構文」であり、2つの事態の間に何らかの繋がりがあるという意味を構文の意味としてもつことを再確認した。さらに「2つの事態の間に何らかの繋がりがある」という意味が2つの事態の連鎖的な継起をいわば誘発する背景要因の存在に支えられていることを指摘した。ここから、当該構文の意味記述を「(何らかの背景要因が存在するために) 事態 A が起ると連鎖的に事態 B が起る」とした。プロトタイプの意味の文では、2つの事態の連鎖的継起それ自体を叙述することに主眼が置かれ、背景要因はまさに‘背景’として存在する。そして背景化した「要因」が2つの事態の連鎖的継起をいわば誘発しているのである。プロトタイプの意味の文のうち、恒常的な2つの事態の継起を叙述するものは人や事物の属性を背景要因とする。このとき2つの事態の継起は個別具体性を欠き、それ自体を叙述するというより、むしろ背景要因を裏付ける根拠となっていると考えられる。2つの事態の継起が背景要因を裏付ける役割を担うという点は、非プロトタイプの意味の文によっても共有される。非プロトタイプの意味の文は“一 V_1 就 V_1P ”, “一 V 就是 NP” という特異な形式を有する。前者の最初の動詞は統語論上の要請に基づいて用いられたものであり、後者は動作性そのものが捨象され、やはり2つの事態の連鎖的継起はそれ自体を述べるためのものではなく、背景要因を裏付けるための根拠となっているのである。何らかの背景要因が2つの事態の連鎖的継起を誘発するという意味を有する当該構文にあっては、背景要因が‘背景’ではなくなって前景化し、それ自体を叙述の主眼に置くという叙述の主眼の転換に動機付けられてプロトタイプの意味から非プロトタイプの意味へと意味拡張していると考えられるのである。島津 2004b:152 では A, B が2つの出来事と捉えられなくなるに従って中核の意味から周辺の意味へと移行していくことを指摘したが、A, B が2

つの出来事と捉えられなくなることは、意味拡張の動機付けである叙述の主眼の転換に伴って生じた言語現象であると言えるだろう。

注

- 1) 原文では b) c) となっているものをそれぞれ①②とし、②の一部を省略した。それぞれの意味項目で挙げられている例文を2つずつ挙げておく。
- 2) 当該構文については、従来、構文のもつ意味そのものに比して動詞や形容詞に前置される“一”に対してより多くの関心が寄せられてきたといえる。
- 3) これについては2.2節で詳述する。
- 4) NPがVの何にあたるかに基づいて分類しており、agent, patient, 結果, 動量, 時量, 原料・方式・道具等の6つである。
- 5) これについては4.3節で検討する。
- 6) 島津2006:29は次のように書いている。文連結における「背景化」の問題について、坪本1998(137頁)は、人間の認知的、知覚的観点からみて、現に進行中の出来事やまだ仮定の段階にある出来事よりもすでに過去において生じた出来事が、また、完結していない出来事やまだ進行中の出来事よりも完結した出来事が「前景」とされやすいことを指摘する。そもそも複文においては、通常、従属節が背景、主節が前景と捉えられるが、“一 A”という形式は、それ自身「背景化」しやすい傾向を構造として内包しているといつてよさそうである。

従属節が背景、主節が前景という複文はもちろんあるが、すべての複文がそうであるわけではない。“一 A 就 B” 構文についてはむしろ等位接続に類するものと捉えるべきであろう。
- 7) 本稿では島津2004bで「中核の意味」と呼んだ①の意味を「プロトタイプの意味」、「周辺の意味」と呼んだ②の意味を「非プロトタイプの意味」と呼ぶことにする。
- 8) “剛”と“刚刚”は同じものとして扱う。
- 9) 文の前に付した「？」はこの文が不自然であるという意味で、原文にはないが筆者が付けたものである。日本語訳の前に「表したい意味」と記したが、この日本語の文それ自体も特に(7)(8)についてはあまり自然ではないことをこわっておく。また、(7)の表したい意味はあくまでもこの文に基づいたも

のである。6頁で述べるように王弘宇 2001:138 はこの文で留学生が伝えようとした意味は“一下课(不做其他)就去食堂吃午饭。”「私は授業が終わると(他のことはせず)食堂に行って昼食を食べた」であると述べている。

- 10) 本稿では王弘宇 2001 で展開されている考え方をこのように呼ぶこととする。
- 11) 王弘宇 2001:139 の説明は次のとおりである。(10) は自然現象, (11) は社会規約を表しており, 中間項が隠れていると説いても理解しがたい。この種の状況はみな一回性の依存関係の用例である。
- 12) 本稿では当該構文の前節が表す事態即ち事態 A を前件, 後節が表す事態即ち事態 B を後件と呼ぶ。
- 13) 例(13)では「一目見る」ことと「心が乱れる」ことの間にあるべき中間項を想定することができず, 王弘宇 2001 の「中間項跳び越え」の考え方では不自然になるはずだと考えられるが, 問題なく成立している。
- 14) 前述のように, 最初の動詞が統語論上の要請により用いられたことで, 2つ目の動詞は意味論的に余剰成分となっているわけである。

例文出典

池莉<一去永不回>亦凡公益图书馆 <http://www.shuku.net> より引用。

冯骥才<走进暴风雨>成都:四川文艺出版社, 1985年。

谈歌<大厂>《人民文学》1996年第1期。

谈歌<大厂续编>《人民文学》1996年第8期。

谈歌<城市热风><城市警察>亦凡公益图书馆 <http://www.shuku.net> より引用。

藤肖澜<蓝宝石戒指>《人民文学》2006年第4期。

王朔<人莫予毒>《王朔文集》第1卷, 北京:华艺出版社, 1995年。

王朔<无人喝彩>《王朔文集》第3卷, 北京:华艺出版社, 1995年。

余华《活着》北京:作家出版社, 2010年。

余华《在细雨中呼喊》上海:上海文艺出版社, 2004年。

张贤亮<河的子孙>《1983中篇小说选第1辑》北京:人民文学出版社, 1984年。

参考文献

李宇明 2000『汉语量范畴研究』华中师范大学出版社。

刘丹青 2005「作为典型构式句的非典型“连”字句」『语言教学与研究』第4期。

吕叔湘主编 1980『现代汉语八百词』商务印书馆。

王弘宇 2001 「说“一 A 就 C”」『中国语文』第 2 期。

吴春仙 1999 「试说“一 V 就是 NP” 句式」『汉语学习』第 5 期。

邢福义 2001 『汉语复句研究』商务印书馆。

島津幸子 2004b 「“一 A 就 B” 形式と“刚 A 就 B” 形式」『中国語学』第 251 号。

島津幸子 2006 「“一 A 就 B” 形式の構文的意味」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 25 号。

坪本篤朗 1998 第 II 部文連結の形と意味と語用論「『語り』の文連結」『モダリティと発話行為』研究社出版。

